

2025 年大阪・関西万博推進本部

《第 8 回議事録》

■日 時：令和 6 年 1 月 24 日（水曜日）16 時 30 分～17 時 30 分

■場 所：大阪シティ信用金庫本店 2 階ホール

■出席者：出席者名簿 のとおり

（彌園万博推進局長）

皆様方、お待たせいたしました。ただいまから、2025 年大阪・関西万博推進本部会議の第 8 回会議を開催させていただきたいと思っております。本日、進行を務めます万博推進局の彌園と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は、大阪・関西万博の開催意義や効果を改めて府民・市民にご理解を深めていただくために、技術研究組合リチウムイオン電池材料評価研究センターの吉野理事長にご参加いただき、ご講演を賜りたいと考えております。なお、本日は、大阪市との包括連携協定に基づきまして、大阪シティ信用金庫様に会場提供のご協力をいただいておりますので、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございます。

それでは、吉野理事長にご登壇いただきますので、皆様、拍手でお迎えいただきたいと思います。先生、よろしくお願いいたします。

【吉野理事長ご登壇】

（彌園万博推進局長）

ありがとうございます。それでは、これから吉野理事長にご講演いただくわけですが、その前に、私から簡単にご経歴をご紹介させていただきたいと思っております。

1948 年に、大阪万博が開催されました大阪府吹田市でお生まれになりました。その後、1972 年に京都大学工学研究科石油化学専攻修士課程を修了され、旭化成株式会社に入社されました。現在も、メインフェローということでご活躍されていると伺っております。研究者といたしまして、様々な賞を受賞されまして、2019 年にはノーベル化学賞を受賞されました。吉野理事長が開発されたリチウムイオン電池は、皆さんが普段からお使いのノートパソコンでありますとかスマートフォンなど幅広い分野で使われておるところでございます。

それでは早速ではございますけれども、吉野理事長、ご講演の方、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（吉野理事長）

どうもご紹介ありがとうございます。吉野でございます。本日は、万博の推進会議ということで、馳せ参じました。今日は、今から 30 分ほど私の方からお話をさせていただいて、その後、30 分ほど吉村知事・横山市長を交えて色々ディスカッションさせていただきたいと思っております。

今日、今から 30 分ほどお話させていただきます演題は「2025 年の重要性」。あえて 2025 年大阪・関西万博の重要性ではなくて、2025 年という、来年ですよね。万博が開催される 2025 年という年は、いかに重要な年かというお話をまずさせていただいて、その年に開催される大阪・関西万博は、さらにいかに重要かというお話をさせていただきたいと思っております。

ということで、今日、私がお話させていただきます内容は、4 点ございます。一つは、先ほどご紹介いただきましたように、私、生まれ・育ちは大阪の吹田市でございまして、1970 年万博というのはまさにごくごく身近で経験しております。そういうことで、当時、私はまだ学生でございましたが、その時の 1970 年という万博、私の個人的な思い出ということで、簡単にお話させていただいて、その後、ちょっと薄く書いておりますが、1970 年の第 1 回の大阪万博と 1995 年という年の話をお話させていただきます。3 番目に、2025 年という年と 2050 年という年、これがいかに重要な年であるかというお話をさせていただいて、それを踏まえて、2025 年大阪・関西万博がいかに重要かという話と、どういうことを私自身が期待しているかというお話をしていきたいと思っております。

まず、1970 年の大阪万博の私の個人的な思い出ということで、お話を簡単にしたいと思えます。先ほど申しましたように、まだ社会人になっておりませんでした。20 数歳の若造の時代でございました。では一体、この 1970 年という年が世界で見たらどんな年だったかと言いますと、極めて騒々しい、混迷を極めるような年でございまして、世界規模でのいわゆる反戦運動があつて、それから同じく、グローバルに世界中でいわゆる大学紛争がもう燃え盛っているような年でございました。日本も同じような状況にありました。そういった中で、第 1 回の万博が開かれましたというのが一つの私の大きな思い出で、そういった第 1 回の万博の一つのバックグラウンドとしては、やはり混迷の中で、これから未来がどうなるのかというのは世界中の人が考えていた、そういう時期に開かれたというのがもう一つでございます。では一体、この第 1 回の万博で何か大きな世界に対するメッセージがありましたという点を最後にお話しておきたいと思えます。ということで次の話題に少しシフトしていきたいと思えます。

1970 年の私から見て、現在の状況を見たときに、確かに大きな変化が起こっております。色々な変化・変革が現に起こりました。その中で、一番大きな変革は何だったんだろうということを考えていきますと、やはり現在のモバイル I T 社会の実現が一番大きな変革であったかと思えます。そういった大きな変革が、第 1 回の万博で何かそれを示唆するようなメッセージがありましたということが、この二つ目のトピックスでございます。では一体、この現在のモバイル I T 社会がいつから始まったのかと言いますと、これは間違いなく 1995 年だというのが誰も共通の見方でございます。1995 年からこの I T 社会というのが生まれ始めました。象徴的なトピックスとしては Microsoft 社の Windows95 のリリース年でございまして、それをスタートに、本当にあつという間に、現在のモバイル I T 社会の実現に繋がっていきました。

ということで、二つ目のトピックスは 1970 年と 1995 年。第 1 回の万博で、このモバイル I T 社会という大きなメッセージが送られていたかということです。結論は、明らかに大きなメッセージが、実はさりげなく発信されておりました。確かに、1970 年の万博は月の石とか

人間洗濯機とか色々話題を誘うようなことを、幾つか色々なパビリオンで行われたかと思えます。その中で、そこそこ話題になっていたのが実はワイヤレスフォンなんです。1970年に現在の携帯電話あるいはスマートフォンみたいなことはできるはずがないんです。技術的にです。ですけど、将来このような世界が生まれるんですというメッセージが、あるパビリオンでさり気なく、そこそこ話題になっておりました。当然のことながら、1970年に現在のガラケーあるいはスマホのような機能を、実際できるはずがないんですが、トリックは確かにあったそうなんですけれども、少なくとも万博の会場で、一般の市民が、北海道あるいは九州で、直接、電話が確かに繋がりました。トリックはトリックでありましたが、これは間違いなく現在のモバイルIT社会に対する、将来、こんな世界が生まれますということは、確かに間違いなくあったと思います。ということは、この万博から大体25年ぐらいして、そのときに発信されたメッセージが実現し始めますと捉えていくべきだと思っております。ということで、次の話題に移りたいと思います。

今度は2025年、来年ですよ。それと2050年、インターバルは同じ25年です。現在、違う意味で世界中が混迷しております。それは、地球環境問題という大きな課題を背負わされ、世界中がその解決に向けて、今、動いております。日本も含めて、そのゴールは2050年という年にターゲットが設定されております。ということは、これは間違いなく、この2025年大阪・関西万博でも、地球環境問題、サステイナビリティ、サーキュラーエコノミーあるいはカーボンニュートラルが、当然、大きなテーマのうちの一つとして、既に取り上げておられると思います。ただ、問題は当たりくじがその中に入っているかどうかなんです。当然、未来予測なので大半は外れます。外れますが、その中で、目立ちませんが当たりくじは間違いなくあります。それをちゃんと盛り込まれているかということが大きな課題だと思っております。そういうことで、この2025年の大阪・関西万博は、2050年に向けての本物のメッセージが盛り込まれておりますかということ、ぜひ考えていただきたいと思っております。

そういうことで、2050年というのは極めて世界にとって、当然のことながら、日本にとっても重要な年であることは間違いありません。そこに向かって進んでいくにあたって、2025年の大阪・関西万博とは、極めて大事な役割を持っていますということが、今日、私が申し上げたかったことであります。そういうことで、最後に、2025年大阪・関西万博に期待するということで、間違いなく、世界中の技術者や研究者以外の色々な立場で、色々な方が世界中でこの2025年に向けて問題解決を図ろうとして、こんな動きは人類史上まだありませんでした。あれだけ世界中の研究者や技術者が、2050年に向けて、今、一生懸命動き出しております。これは間違いなく答えは出ます。あれだけの人とお金を使って2050年に向けて動いているわけですから、間違いなく答えは出てきます。問題は、そのうちの何パーセントが日本から発信されたかということだと思っております。2050年というのは大きな変革があって、恐らく、現在の産業の半分ぐらい多分無くなると思います。その分、新しい産業が生まれてくるわけでごさいます。当然のことながら、どの国がこの新しい産業に参画できる権利を有するかということになるかと思っております。当然、それは新しい産業の創造に貢献した国ということになります。ということで、日本が何パーセントぐらい、もちろん100パーセントというのはありえないわけですが、できれば、少なくとも25パーセントは日本あるいは日本人がこれだ

け貢献したんですというような状況を 2050 年に作っておかないと、日本の産業は非常にピンチになりますというのが私の見方であります。逆に、当然のことながら、そこに色々なイノベーション、当然のことながら、色々なノーベル賞の対象も当然その中に数件あるいは数十件出てくるかと思えます。それぐらい大きなイノベーションが 2050 年までに起こって、その中で日本がどれだけ貢献しましたかということが、日本の未来に大きな意味合いがあるかと思えます。そういうことで、その極めて重要な 2025 年に行われる大阪・関西万博は極めて重要で、その中にちゃんと未来の方向性、全てが当たりくじである必要はないんですけど、少なくとも本命筋の当たりくじはちゃんと含まれておりますと、ぜひ、そうしていただきたいと思っております。

とはいえ、なかなか 2050 年の世界をどのように想像して表現するかということは非常に難しいことではあるのは間違いないかと思えます。ということで、私自身、当然リチウムイオン電池に携わっております。リチウムイオン電池とカーボンニュートラル 2050 年の世界という非常に重要な設定がございますのでリチウムイオン電池から見た 2050 年の世界はこうなんですという動画を、色々な講演やあるいはディスカッションするときに使おうということで、京都にある K R I という研究開発会社と一緒に動画を作っております。その後も色々なバージョンを現在作っておりますので、少しご参考になればということで、6 分ぐらいございますが、動画をご覧いただきたいと思えます。

#### 【動画放映】

お楽しみいただけましたでしょうか。私の講演はこれで終わらせていただきたいと思えます。この後、30 分ほど色々知事・市長とディスカッションさせていただきながら、少し私からもお願いしたい点もございますので、ぜひよろしくお願いしたいと思えます。どうもありがとうございました。

#### （彌園万博推進局長）

吉野先生、貴重なお話をどうもありがとうございました。それでは、知事・市長にも登壇いただくわけですが、準備をしておりますのでそのまま少しお待ちください。なお、後になりましたけれども、本日の様子は YouTube でライブ配信させていただいておりますので、お知らせさせていただきます。

それでは、知事・市長、ご登壇いただきますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

#### 【知事・市長登壇】

ここからは、知事・市長と吉野先生の意見交換と申しますかパネルディスカッションと申しますか、そういったことで進めていただければと思えますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

まず、知事・市長から、これまでの吉野先生のお話でありますとか、ただいまの映像を見

て、ご質問やご提案がございましたら、ご発言いただきたいと思います。

(知事)

府知事の吉村です。吉野先生、この度は本当にありがとうございます。貴重なご講演をいただきまして、話を聞いていて、そうか、そういう視点かということのを改めて、感銘というか、すごくストンと胸に落ちるなと思いました。ストーリーとして、1970年と1995年、このインターバル、1995年のいわゆる Microsoft の Windows95 ができた I T 社会が始まったときは、実は1970年にそういったメッセージがあり、そして技術や産業がそこに向かっていこうという熱意が、実はそこに向かっていったんだと僕なりに解釈して、2025年はもう2050年のカーボンニュートラル、これを実現する時代にどういうメッセージを発信していくのか、どういうメッセージ共有していくのかということが、ものすごく大切だということと、日本における役割がものすごく大事じゃないかと。2050年の未来社会にどれぐらい日本が産業技術として貢献して、そこにイニシアティブを持って前に進める役割を果たしているのか、そこから逆算して考えると、2025年は本当に大切なんじゃないかと僕も受け止めをいたしました。普段は、いつも記者とやり取りしているんですけど、万博の費用がこれだけ上がることについてどう思いますか、経済効果はどうですかとそんなことばかり話をしているので、こういう大きな目線が少し抜けていたなという気が特に最近はしております。万博を主催する側として、地元責任者として、大阪・関西から2050年にどういうメッセージを発信するのかということのをより大切にして、この万博を改めて進めていけたらなと思いました。

大阪の地元パビリオンも、2050年の未来社会に紛れ込んだらどういった社会があるだろうかということのを想定したストーリーを、今、作っています。そして、他国のパビリオンも、色々な出展があると思うんですけど、2050年に向かって何を考えているのかということも注意しながら、そこで見て、日本が果たす役割というものを考えられたらと思います。レガシーというか、万博からその先の25年間のこの期間がすごく大事なんだということのを改めて思いを深くして、万博を取組んでいければと思います。

吉野先生のお話を聞いていて、一点ご質問させていただけたらと思うんですけど、2025年大阪・関西万博って、どうしても吉野先生が持たれているような技術やイノベーション、未来社会の視点というものがあまり共有されていなくて、目の前の事の話ばかりが多いんです。こういう未来社会というような議論がなかなかないため、日本の産業技術の部分が弱くなってきているのかもしれないんですけども、そのあたりを吉野先生にお聞きできればと思います。

(吉野理事長)

実は、私は2019年にノーベル化学賞を受賞いたしまして、その後、吉村知事にご挨拶に行くと、当然万博の話が出ました。そのときに、私ができる範囲でご協力しますという話をさせていただきました。その後すぐ、そのときにも、こういう推進会議があったのかどうかよくわかりませんが、府庁の若い担当者の方がすぐ来られまして、5年後(2025年)に向けて色々ディスカッションさせていただきたいということと、色々知恵があれば教えてください

いということで、何度かその若い担当者の方が来られました。そのときには、少し今日お話ししたような話をさせていただきました。

ところが、残念なことにその後すぐコロナ禍になりまして、当然、担当者との色々なディスカッションの場も少し薄れたということと、それから、これ私の勝手な類推なんですが、当然、府庁の中でもコロナ対策で色々大変な状況になられて、一番肝心の基本コンセプト作りとそれを実行するにあたっての色々な仕組みを作らないといけない時期に、コロナ騒動に入ってしまった、多分、一番大事な期間が飛んでしまったのではないのかということで、なんだかんだしているうちに、あと2年、あと1年ということになって、ということが今の現状ではないかと思っております。

そういった意味で、本来ですと、若い方も非常に前向きに色々熱意を持って議論させていただいたんですけど、多分、その担当者の方もコロナ対策の方に回ってしまったんじゃないかと思っております。もちろん、これから新しいことをやろうっていうことは、時間的に難しい面があるとは思いますが、後ほど私からもいくつか提案させていただきたいことがありますけれども、まだまだその数年間のロスを取り戻す方法は色々あるかと思っておりますので、また議論させていただきたいと思っております。

(彌園万博推進局長)

横山市長はいかがでしょう。

(市長)

吉野先生ありがとうございました。大変、インパクトと、知事がおっしゃられたとおりにごく感銘を受けた次第です。1970年にワイヤレスフォンが展示されたというのは僕も認識していたんですが、その25年後に、確かに今のモバイル社会を形づくるきっかけとなるWindows95というものがあるということは、それは本当おっしゃるとおりなので、そこからはあつという間に加速して、今は何でも携帯電話でできるような時代になってきたと思っております。

2025年ではどういう未来を描いていくのかというときに、持続可能な社会を作るといことは、非常に、今振り返っても良いメッセージだと思います。昔の万博と違って、今は、世界が面する課題を解決していく万博にするという意味で、世界が面する課題というものを、どこに置くかということも重要だと思っております。

一つは、2050年に向けて、脱炭素を、地球の温暖化というものは深刻ですから、世界がこれを共有して技術を共有することで、カーボンニュートラルをめざしていくということが一つ。もう一つが、やはり「いのち輝く未来社会のデザイン」の中で、健康寿命の延伸ということ、非常に重要なテーマだと思っております。というのは、色々な国の事情もあるとは思いますが、多くの国で、これから長寿命化、そして少子化は大きな課題になってくると思われますし、我が国ではもう大きな課題となっております。

そんな中で、今、各自治体、国もそうですが、いわゆる扶助費、社会保障に関連する経費というものが非常に逼迫する中で、医療は発達すると思うので、それに合わせて健康であるということはこれからの社会の中で極めて重要な課題だと思っております。持続可能な社会を作

るという大きな目標の中で、カーボンニュートラルと健康寿命の延伸という二つの大きな方向性を描いていくという中で、健康寿命延伸に関しては、医療技術の発展や自分たちが持っているヘルスレコードやデータを共有して、効率的な医療を展開していくというところと、持続可能なカーボンニュートラルを進めるにあたって、まさに先生の研究されている電池のところや再生可能エネルギーの発電効率を上げるとか、水素発電、そして核融合も含めて色々な技術がこれから出てくると思います。

こういったところをしっかりと取組んでいかないといけないと思うときに、ぜひ、少しお知恵やアイデアを賜りたいのは、2025年という万博、そしてその先の未来に向けて、いわゆる行政や自治体がなすべきことと言いますか、今、進んでいない中で、先ほどオープンデータと申し上げましたが、例えば、警察が持っている交通量データと信号のデータを結びつけると、夢物語かもしれないですけど、信号機が交通量に基づいて変わると、全く交通渋滞を起こさない街というもの、もしかしたらできるかもしれない。でも、そのためにはデータを共有して、自治体もそれを取り込んでいくという作業が必要になると思います。でも、ここにあって、データが共有できたり、シェアリングの話の中で、例えば規制のハードルが高いとか色々あると思うんです。スタートアップ支援をしなければいけないのに投資が全然行われてないとか、先生が思われる、自治体がこの未来に向けてなすべきことについて、何かアドバイスをいただけたらと思うんですが、いかがでしょうか。

(吉野理事長)

それは、非常に多岐に渡る問題だと思うんですけど、一つ、こういった未来を語る、あるいは未来をに向けて動こうとするときに、行政として、ぜひ、私からお願いしたいのは、必ず、社会の変革が起こることというのは、いわゆる既得権益者の意見っていうものをどう捉えるかということが非常に難しいんですよ。当然のことながら、変わったら困るという人がいっぱい出てまいります。いわゆる既得権益者ですよ。この人たちの意見を入れちゃいますと、変革というのは完全に止まります。それで、世界に負けます。過去のIT革命の中でもそういう局面が色々ありました。

ここで、今から振り返ってみれば、目先の利益を追求することによって、10年・20年先に日本が大損した例がいっぱいあります。それは結局、何でそういうことが起こったかと言いますと、既得権益者の意見を入れちゃったからなんです。

そういうことで、行政的にそういった意味で、大きな目で見られるときに、この既得権益者の言っていることは1年・2年先は確かにそのとおりなんですけど、10年先・20年先もそれで良いんですかという問いかけを、ぜひ、していただければ、彼らもちょっと考えると思います。そういうことで、ぜひ、行政としても、長期的な目で見えていただくということが、非常に重要ではないかと思います。

(彌園万博推進局長)

ありがとうございます。知事・市長、他は大丈夫でしょうか。

(吉野理事長)

では、私から少しよろしいですか。先ほどの講演の最後で、お願いしたいことが一つ・二つございますということで、ぜひ、こうことに取組んでいただければということのお話をさせていただきますと思います。

まず、お金がほとんどかからない話から。地球環境問題、カーボンニュートラル社会の実現というのは非常に重要なことではありますが、残念ながら、まだ、我々は答えを出す道筋を見つけれられておりません。一番、それで心配と言いますか、被害を被っているのは子どもさんたちなんです。子どもさんたちの地球環境問題の受け取り方は、大人と全然違います。特に、子どもたちの心を蝕んでいるのは、地球環境問題に関する議論の中で、未来に対する不安感なんです。確かに、このままいくと、地球は、2050年には気温が40度を超す、45度・50度の世界になってきますというようなことを言われると、当然のことながら不安になります。もっと深刻なのは、地球環境問題がそもそも起こってきたのは何かって言いますと、人類が発展したからなんです。地球環境問題に対する抜本的な、理想的な答えは、人類が滅亡することなんです。これによって、一気に解決します。子どもたちは、多分、そんな受け取り方をしちゃうんです。

従って、そこを何とか、未来に希望を持たせるようなことを踏まえながら、地球環境問題の重要性を議論していかないと、子どもたちも非常に心配しちゃいます。そういうことで、ぜひ、私からお願いしたいことの1点目は、やはり、そういうような成功例を、過去にこんな成功例があるんですという話も、ぜひ盛り込んでいただくようにしていただきたいと思っております。

具体的な例は、オゾン層破壊の問題なんです。先ほど、1970年万博の話をしましたけれども、私もちょうど社会人になる頃です。よく覚えております。現在の地球環境問題、CO2問題が少し囁かれ始めた頃です。そのときに、二つ問題点が指摘されていきました。一つは、現在のいわゆるCO2の問題です。地球温暖化の問題。あともう一つが、オゾン層破壊だったんです。どちらかという、この1970年時点では、オゾン層破壊の方が非常に深刻に受け止め始めました。特に、南半球のオーストラリアの人たちは、自分たちは、全国民、皮膚ガンで死んじゃうんですかっていうような、そんな議論もありました。その二つが、大きな人類共通の課題として囁かれ始めたのは、実は、第1回の万博の頃なんです。

まだ大きな話題にはなっておりませんが、その後どうなったかっていうことで、実は、オゾン層破壊はもう解決しましたと言い切って良いと思います。原因が究明されて、その対策がなされて、北半球は2030年には元通りのオゾン層に戻りますというような統計データが出ています。南半球は2050年までに完全に復活。これにつきましては、このオゾン層の問題も然り、地球環境問題も、当然、国連が重要な課題として取り上げておりますので、このオゾン層破壊の今日に至るまでの経緯を、ぜひ、PRしてくださいということを国連が言っているんです。

特に、地球環境問題に携わっている人たちあるいは子どもたちに、やっぱり成功例の一つとして、当然、その規模、スケールは違うと思います。オゾン層破壊の問題と地球温暖化の問題のスケールは少し違うんですけれど、その過程で、オゾン層破壊が原因究明からその対

策で、結果、今どうなっていますかという一連のシナリオは、間違いなく成功例なんです。そういうことを踏まえながら、オゾン層については、原因がこれで、人類がそれに気がついて、対策が今こうなっているんです。同じように、地球環境問題、CO2の問題につきましても、今はまだ明確な方向性は出ていないけれども、人類がちゃんとそれに気がついて、一生懸命それを直すような努力をする、いずれ間違いなくちゃんと解決しますと、その二つをセットで、ぜひ、取り上げていただきたいと思います。

特にオゾン層破壊につきましては、国連も成功例を世界にPRしたいというのがありますので、ぜひそれを2025年の大阪・関西万博で、大きく取り上げていただいて、それはもう人類共通の成果ですと、それに基づいて、温暖化の問題もちゃんとやっていくんですと、セットで世界にメッセージを送れるようにしていただければ、一番安心するのは子どもたちだと思います。

メディアの方がいらっしゃいますけれど、メディアの方の良いところ、悪いところは色々あるんですが、大騒ぎするときは大騒ぎされるんです。オゾン層のときもそうでした。オーストラリアの人は全員死んでしまうというトーンの記事が何度かなされました。それが、今はもう解決したんですとなると、ニュースバリューがなくなるということなのか、あまり取り上げていただけません。ぜひ、それを申し上げておきたいと思うんです。

それとついでに、実はそういうことで、国連がオゾンデーという日を決めております。9月16日です。調べていただければすぐ出てくるかと思いますが。まさに大阪・関西万博の終盤辺りですよ。先ほどお話したような内容を少し万博の中に盛り込んでいただいて、9月16日には国連の人も呼んで、盛大に、オゾンデーはこういうもので、というようなシナリオを、ぜひ、盛り込んでいただければと思っております。それが一つ、私からのお願いごとでございます。

(彌園万博推進局長)

吉野先生、ありがとうございました。知事いかがですか、今のお話を受けて。

(知事)

今、お聞きしていて、子どもたちが、結局、この地球環境問題についても一番不安で、一番被害を受けるのは将来の未来の子どもたちだっていう、それに対して、僕らはどういう責任を負っていくのかということがすごく大切だということも改めて思いました。人生の順番がありますから、僕も横山市長もそうですし、でも、今生まれた子どもたちとか自分たちの子ども・孫の世代が本当に今のCO2、地球環境の問題で大丈夫なのか、そこで一番不安に思っているのは若い世代が、一番、そこで影響を受けるのも若い世代なので、それに対する解決策を、この2025年に作っていかうと。まさに、未来社会を作るといふそのものだと思いますので、その視点すごく大事だなと思います。

そして、カーボンニュートラルの問題は確かにあるんですけど、オゾン層と絡めると、ああ、そうかと思いました。僕も子どものころ、オゾン層の話はあって、そういえばどうなっていたのかなと。今思えば、そうかと、原因究明されて対策をとられて解決して、あの危

機を人類の英知で乗り越えたんだと。同じように、そういった成功例を持って、自分たちでやればできるんだという、この成功体験をもとに次に行くっていうのは、カーボンニュートラルでもできるんだというセットのストーリーは非常にわかりやすいと思いますので、吉野先生がおっしゃったこのストーリーを博覧会協会とも共有して、そして、大阪館もそうですし、私達ができるメッセージ発信に取組んでいきたいと思います。9月16日は、まさに万博の最中でもありますから、オゾンデーということで、オゾンの問題を解決した原因究明とか対策とか、現在というのを重ね合わせて、未来はCO2の問題をこういうふうに解決していこうということ、少し仕組みを考えて、実際に実行したいと思いますし、今年の9月16日はもう半年ぐらいになります。プレで何かできないのかということも考えて、成功体験によって変わっていく、それで、オゾンの問題も確かに、CO2の問題とセットでやっていくということは、すごくメッセージとして、人間の知恵、技術によって解決できるんだという発信にもなると思いますので、それは内部で検討させていただきたいと思います。

(吉野理事長)

ぜひ、よろしく願いいたします。ちなみに、オゾン層破壊の原因究明とその対策で貢献された先生がいらっしゃいます。1995年のノーベル化学賞を受賞されています。3名の方が、ご存命かどうか私もよくわかりませんが、当日お招きして、色々お話いただくということも一つの見方かと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(知事)

そのときは吉野先生もぜひお願いいたします。

(吉野理事長)

もう一つは、少しお金がかかる話なんですけど、ぜひ、一つの2050年の姿としまして、サーキュラーエコノミーという言葉がございます。言葉はわかるんですけど、具体的にどうということなのかはなかなか一般の人はわかりにくい面があります。当然、もう一つはその規模なんです。サーキュラーエコノミーのエリアをどれぐらいの規模で見るといいんです。ちょうど夢洲が約400ヘクタールぐらいです。多分、一つのクローズドのエリアとして、サーキュラーエコノミーを実現するユニットとしてはちょうど良いぐらいの大きさかと思うんです。一体、何をサーキュラーにするかということ色々検討していただいて、例えば、電気は全部サーキュラーエコノミーです。地産地消です。夢洲で発電して、夢洲で使っているんです。ちょっと概算で申し訳ないんですけど、もし、万博で使う電力の出力が1ギガワット程度であれば、十分、夢洲のエリアでまかなえる範囲だと思います。面積的に。夜はどうするのかというところは色々知恵を出していただければ、万博がサーキュラーエコノミーで賄えましたとなれば、世界に対しての凄いメッセージになるかと思っております。

ただ、これから1年先の話になりますので、今から動いて間に合うかどうかはありますが、サーキュラーエコノミーの一つのモデルを出していただければ、サーキュラーエコノミーはこういうことなのかと、一般の人にもよく理解できるのではないのかと思っておりますので、

少しご検討をお願いします。

(市長)

先生、ありがとうございます。サーキュラーエコノミーをいかに実現していくのかという取組も、小さい規模だったらスマートシティを作ってそこでやっていくという取組がありまして、この夢洲を実験場として捉えるのは非常に重要なアイデアかと思います。

今後、万博でも展示されると思いますが、ペロブスカイトの発電であったり、大阪市は帯水層蓄熱発電という形で、地下にある地下水を用いて、温度の変動が少ないものですから、それを冬場と夏場の空調機能を使うというシステムであったり、色々アイデアは取り入れた上で、電気をいかに消費していくか、その島で完結するようなエコノミーを作っていくという発想は非常に重要かと思います。

今後、このまちづくりを、民間の事業者さんから提案を受けて方向性を示していくこととなります。先生にいただいたアイデアも参考にしながら、未来に向けて、夢洲のまちづくりというものを進めていきたいと思っています。ご意見ありがとうございます。

(彌園万博推進局長)

ありがとうございました。そうでしたら、お時間ということになります。吉野先生、大丈夫でしょうか。

(吉野理事長)

はい、大丈夫です。

(彌園万博推進局長)

ありがとうございます。そうでしたら、ただいまの知事・市長そして吉野先生との意見交換、パネルディスカッションをこれにて終わらせていただくということに加えて、本日の会議の議題は以上でございますので、会議の方も閉じさせていただきたいと思っています。

本日はお忙しい中、本当に吉野先生、ありがとうございました。最後に皆さん、大きな拍手をよろしくお願いいたします。

それでは、本日の万博推進本部会議はこれで終わらせていただきたいと思います。ご出席いただきました皆様、本当にありがとうございました。一般傍聴の皆様、本当にありがとうございました。大阪シティ信用金庫の皆様も本当にありがとうございました。府・市の関係者の皆さんも本当にありがとうございます。以上でございます。